教員によるエッセイコーナー

談話室

時間哲学者の音楽的遺産

文学部哲学専攻　教授　平井靖史（ひらいやすし）

私が初めてアンリ・ベルクソンの時間哲学に触れたのは大学時代だった。「持続」という概念に魅せられ、その哲学的射程の深さに圧倒されながら、飲み込まれるようにして研究を続けてきた。それから四半世紀の時を経て、その思想的奥行きは底知れぬ広がりを見せ始めている。

私が代表を務めるＰＢＪ（Project Bergson in Japan）では、ベルクソン哲学を分野横断的な観点で検証し直し、その現代的再評価を組織的に行っている。先日、スイスのジュネーブ国際・開発高等研究所から、キャロリン・Ｎ・ビルトフト准教授をお招きし、日本人研究者2名を交え三田キャンパス東館ホールにてワークショップを行った。ベルクソンの父ミハウの残した楽譜や手稿の調査を通じ、哲学者ベルクソンの思想形成における音楽的背景に光を当てる彼女からは、他では聴けない興味深い話を伺えた。

音楽家のミハウ・ベルクソンは、これまでショパンの弟子と伝えられてきたが、実証的な証拠は見つかっていないという。しかし、彼がショパンの熱心な崇拝者であったことは間違いない。１８３０年、ショパンがポーランド独立運動の渦中でウィーンからパリへと向かい、祖国の悲運を「革命」のエチュードに昇華させた時代。父ミハウもヨーロッパを転々としていた。ミハウの楽曲にはクレズマー※音楽特有の音階は使用されていないという。これは当時の同化ユダヤ人としての立ち位置を考える上で示唆的だ。息子アンリの感性に与えた影響も単純なものではなさそうである。

明治大学の合田正人教授は祖国の揺らぎとリズム概念を、駿河台大学の山下尚一教授は音楽聴取における神経科学的観点を論じられた。ジャンケレヴィッチが言う「ラプソディー」の概念は、時間を均質な流れではなく、質的な重なりとして捉えるベルクソンの持続と響きあう。バックグラウンドも言語も異なる3名の研究者が、ベルクソンと音楽というテーマのもとで対話する。時間と音楽、そして思想の交差点に立ち会えた気がした。研究者として、このような知的興奮に出会えることの幸せを、あらためて実感している。

PBJ ワークショップ
「ベルクソンと音楽の夕べ」ポスター

※クレズマー（Klezmer）とは、東欧のユダヤ人の伝統的な民俗音楽とその演奏スタイルのこと。独特な音階やリズム、演奏上の特徴で知られる。